2025年3月30日　説教「百倍の実を結ぶ」

ルカの福音書8章1～15節

回は7章36～50節から学びました。そこでは罪深い女がイエスの足に香油を塗ったことなどについて、イエスはたとえをもって話されました。つまり、より多く赦されたことを知った女性について教えられたのです。

１．イエスと供に歩んだ者たち（1～3節）

①神の国を説き（1）**「その後、イエスは、神の国を説き、その福音を宣べ伝えながら、町や村を次から次に旅をしておられた。十二弟子もお供をした。」**

その後もイエスは神の国について教えられました。町々、村々を巡回されて、福音の宣教をされたのです。そこに伴っていたのは、イエスに従った12人の弟子達でありました。

②イエスによって救われた女性たち（2）**「また、悪霊や病気を直していただいた女たち、すなわち、七つの悪霊を追い出していただいたマグダラの女と呼ばれるマリヤ」**

行動を共にした者達には女性達もいました。イエスによって、七つの悪霊を追い出してもらったマグダラのマリヤは十字架に至るまで、主に仕えました。彼女はイエスによって、その人生をまったく新しくされた人でした。

③イエスに仕えた女性たち（3）**「自分の財産をもって彼らに仕えているヘロデの執事クーザの妻ヨハンナ、スザンナ、そのほかおおぜいの女たちもいっしょであった。」**

ヨハンナはヘロデ・アンティパス王の執事だったクーザの妻でした。スザナについては情報が他にありません。他の大勢の女たちとともにも、生活や財政的な援助もしていました。

２．種蒔きのたとえ話（4～8節）

①大ぜいが集まり（4）**「さて、大ぜいの人の群れが集まり、また方々の町からも人々がみもとにやって来たので、イエスはたとえを用いて話された。」**

方々から集まって来た人々に、イエスはたとえを用いて話されたのです。

②道ばた、岩の上、茨に蒔かれた種（5～7）**「種を蒔く人が種蒔きに出かけた。蒔いているとき、道ばたに落ちた種があった。すると、人に踏みつけられ、空の鳥がそれを食べてしまった。また別の種は岩の上に落ち、生え出たが、水分がなかったので、枯れてしまった。また、別の種はいばらの真中に落ちた。ところが、いばらもいっしょに生え出て、それを押しふさいでしまった。」**

イエスは種蒔きのたとえを話されました。四つの地に種が蒔かれました。第一番目の場所は道ばたでありました。そこは人も往来しますから、踏まれたりもします。そのうちに、空の鳥が見つけてそれを食べてしまったのです。第二番目は岩地でした。少しは土がありましたので、芽を出したのですが、

水分を確保できずに、そのうちに枯れてしまいました。第三番目は、とげのある低木である茨の中でした。土の上でしたから芽は出したのです。しかし、そのうち茨の成長に阻まれてしまいました。

③良い地に蒔かれた種（8）**「『また、別の種は良い地に落ち、生え出て、百倍の実を結んだ。』　イエスは、これらのことを話しながら、『聞く耳のある者は聞きなさい。』と叫ばれた。」**

第四番目は良い地でした。そこに蒔かれた種は、芽を出して大きくなり百倍の実を結んだというのです。イエスは話を終えると、「聞く耳のある者は聞くがよい」と言われ、そこから学びとることを促されました。

３．子どもたちが証明（49～15 節）

①神の奥義（9～10）**「さて、弟子たちは、このたとえがどんな意味かをイエスに尋ねた。そこでイエスは言われた。『あなたがたに、神の国の奥義を知ることが許されているが、ほかの者には、たとえで話します。彼らが見ていても見えず、聞いても悟らないためです。』」**

弟子達はたとえ話の意味を尋ねました。するとイエスは、弟子達には直接的に神の奥義を伝えられても、福音を聞いたことがない人々や、心を閉ざしている人々は悟らないので、たとえで話すのだと伝えられます。

②三つの地の意味（11～14）**「このたとえの意味はこうです。種は神のことばです。道ばたに落ちるとは、こういう人たちのことです。みことばを聞いたが、あとから悪魔が来て、彼らが信じて救われることがないように、その人たちの心からみことばを持ち去ってしまうのです。岩の上に落ちるとは、こういう人たちのことです。聞いたときには喜んでみことばを受け入れるが、根がないので、しばらくは信じていても、試練のときになると、身を引いてしまうのです。いばらの中に落ちるとは、こういう人たちのことです。みことばを聞きはしたが、とかくしているうちに、この世の心づかいや、富や、快楽によってふさがれて、実が熟するまでにならないのです。」**

たとえの意味は、まず種とは御言葉であることが明かにされます。そして、第一の道ばたに蒔かれるとは、聞いても受けとめないので、悪魔がその人たちから御言葉を持ち去ってしまうことで、第二の岩の上に落ちた種とは、聞いた直後は喜ぶものの試練が来ると身を引いてしまうことで、第三にいばらに蒔かれた種とは、御言葉を聞いて受け入れても、そのうちに富、快楽などの誘惑によって御言葉を聞く心が消えてしまい結実しないことだと、解き明かされたのです。

③良い地の意味（15）**「しかし、良い地に落ちるとは、こういう人たちのことです。正しい、良い心でみことばを聞くと、それをしっかりと守り、よく耐えて、実を結ばせるのです。」**

第四は、良い地に蒔かれた種でしたが、御言葉を真っすぐに受け止めて、素直に学び、その御言葉のように生き、成長のために必要な忍耐をもって進むことによって、多くの霊的な結実をすることだと言うのです。

《結論》　今朝のイエス・キリストがお語りになったたとえ話は、ご自分でその意味を解き明かしてくださっている特徴的な箇所です。このたとえ話から三つのことを学んでいきます。

第一に、道ばたに蒔かれた種のことです。ここの解き明かしで、イエスは御言葉を聞いた時に、悪魔はこっそりと見ていると言われます。そして、人が救い主を信じて救われることがないように、御言葉を持ち去ってしまうというのです。御言葉を聞いた時、読んだ時、学んだ時というのは一番恵まれる時です。しかし、悪魔はそれを最も嫌うのです。ですから、時あらばと、ねらいをつけて、それを奪い取ってしまおうとするのです。皆さん、ここで今聖書を学んで主の御言葉をいただきます。しかし、帰り道に入り、玄関口のドアを出たあたりで、もう御言葉のことは忘れてしまうことがありませんか。サタンの手口にはまらないようにしたいものです。

第二に、岩の上に蒔かれた種といばらの中に蒔かれた種についてです。いずれも芽を出して少しは成長するのです。御言葉がその人のうちに働いて、成長しようとするのですが、妨げてしまう要因が働きます。それをイエスははっきりと、指摘されました。ここでは、岩の上に蒔かれた種は土が薄いので強い日照りが来れば枯れてしまいます。強い日照りをイエスは、試練だと示されています。少しつらいことがあると身を引いてしまうのです。いばらの中に蒔かれた種については、いばらが成長を阻むというわけです。それについてイエスは、この世の心づかい、富、快楽を上げられています。確かに、試練は霊性を弱くし、私たちの肉を喜ばすものは、大変な誘惑です。ここで気をつけたいことは、クリスチャンには何も楽しいことがないのかという考えることです。そんなことはありません。「正しい者たち。主にあって、喜び、楽しめ。すべての心の直ぐな人たちよ。喜びの声をあげよ。」（詩篇 32:11）とあるように、神を見上げる者にも、喜びや楽しみあるのです。

第三に、良い地に蒔かれた種についてです。御言葉を素直に聞いて、従うので、どんどん成長するのです。試練があっても、主に信頼するときに、実が結んでいくのです。この原則は旧約時代からありました。「主の教えを喜びとし、昼も夜もその教えを口ずさむ。その人は、水路のそばに植わった木のようだ。時が来ると実がなり、その葉は枯れない。その人は何をしても栄える」（詩篇 1:3）。イエスはヨハネ 15 章において、枝がぶどうの樹につながっているならば、実を結ぶと教えられています。また、パウロの書簡であるガラテヤ人への手紙 5 章では「御霊によって歩みなさい」と勧められた後に、御霊の実は「愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制」ですとあります。

誰しも実を結ぶ歩みをしたいと願っていることでしょう。しかし、罪が成長を邪魔することがあります。「明日のための心配は無用です」は今年の御言葉ですが、思い煩うことは、ある側面では罪です。主への信頼の欠如という罪です。実際、思い煩うと、人間的に考え始めます。主がことをなしてくださるということを忘れてしまいます。私たちを主から離そうとする思いや出来事誘惑は多々あります。御言葉を味わい、主に信頼して歩んでいきましょう。